クラブ今昔

昭和6年創部 音楽部 伝統が脈々と受け継がれる

定期演奏会は、平成26年2月1日（土）に開催

創部間もない音楽部

本校音楽部の創部は、満州事変の没発した昭和六年まで遡る。当時の本校第五代校長、松本喜一（昭和四年～七年在籍）は着任当初より、学内に情操教育を高めるために、スクール・バンド結成に強い意欲を示し、音楽好きだった、甘粕外介教諭らが中心となり、バンド作りがスタートする。当時本校には軍事教練を盛んにするためのラッパ班が設けられていて、歩兵第三十四連隊の兵士から、手ほどきを受けた者や、尺八や、ハーモニカ奏者に加え、多少でも音楽に素養の有る学生達がバンド結成のために招集されたが、肝心な楽器の購入費の捻出を、同窓会に呼びかけるが、「男が今時、音楽とは何事か」と猛反発を受け、バンド結成は資金難から一時頓挫しかけたが、OBの堀田五郎氏（第十八回・大正八年卒）から一時資金を借用することで、楽器を調達し、バンド結成に至った。

尚、堀田氏は昭和四十三年に本校第五代同窓会長に就任している。

結成当初の部の名称は、「学芸講演部」とし、十一年度から「管学部」、十三年度より「音楽部」と改名されている。在任中の松本校長は、大変な、熱の入れ方で、新入部員に対して「学芸講演部員を命ず」との校長、直々の辞令を出す程の特別扱い振りであった。外部より、音楽に卓越した阿部軍治氏を指導者に迎え、連日猛練習が続き、もともと、音楽センスのあった部員達の努力で一ヶ月程で、国歌、校歌、スコットランド民謡等を、マスター出来る程の腕前に成長し、部員としての初演は、四月の新入生紹介式での、校歌演奏であった。五月には、静商対静中（現静高）の天覧野球記念試合の入場式で、国歌と行進曲を吹奏し、十一月に静岡草薙球場で行われた、日米野球での入場式で、日米両国歌と、行進曲「ブラック・プリンス」を吹奏し、時の、大スター、ベーブ・ルイスやゲーリック、澤村投手らが奏でるメロディーに乗って入場した。創部時の音楽部にとっては輝やかしい昭和六年度であった。松本校長は七年に大阪市立天王寺商業学校長に転任後も、静商バンドへの思いは強く、部員達を大阪に招き、天王寺商業バンドとの合同演奏会を自ら、企画、実現させた。昭和八年には、本校音楽部はNHK全国放送に出演し「凱旋」外四曲を演奏し、ラジオ普及率も低い時代に電波を通して全国に紹介された。

昭和十年代になると、戦時体制が増々強化され、教育活動にも大きな変化が生じた。

軍事に関連する学校行事が急増し、教職員も学生も「愛国心」や「自己犠牲的奉仕」を賛美し鼓舞する傾向が強くなり十一年に、二・二六事件、十二年に日中戦争勃発、十三年には、国家総動員法が公布。十四年に国民徴用令が出され、本校学生も集団勤労作業や、援農作業に汗を流した。十六年に太平洋戦争に突入して、統制経済が増々強化され、クラブ活動はもとより、学校教育の機能までも停止に至る時代であった。

やがて多くの犠牲を払いながら、二十年に終戦を迎え、国民が復旧、復興に懸命に立ち上がり始めた。二十三年に、新制高等学校が発足し、本校名も静岡県立静岡商業高等学校と改称し、翌二十四年春には、初めて男女共学となり本校にも、十五名の女生徒が入学する。終戦直後の音楽部は楽器調達もままならず、大八車で楽器の借用に出掛けたり、OB達に芳加帖を持って歩き回り、日本鋼管から、おさがりを譲り受ける有様だったが、二十四年秋には、第一回定期演奏会を公会堂で開催、静商ブラス・バンドが復活した。

この時代は、吹奏楽演奏の全国規模の大会や、コンクールの催しもなく二十五年に関東地区を中心に十五校位が参加した関東吹奏楽コンクールに静商バンドも出演し「ワシントンポスト・マーチ」と「ペルシャの市場」を演奏した。指揮は先生達だったが、唯一本校は学生指揮者で会場を沸かした。すべての演奏が終わり、出場校と関係者の投票で非公式ながら、静商バンドは第二位の好成績を残した。この時期には、フルートやピッコロ奏者として、女性部員も数名在籍していた。

部員数も四十名を超す程になった二十六年秋には、アメリカ大リーグが来日し、赤バットの川上哲治、青バットの大下弘選手らの、全日本軍が静岡草薙球場で対戦し、本校ブラスバンドが、守備交代の合間に「星条旗よ永遠なれ」とか「セントルイス・ブルース」等を演奏し、試合の盛り上げに一役買った。

昭和23年当時のブラスバンド部

戦後一早く復活した音楽部は、昭和24年には第1回の演奏会を静岡市公会堂で行った。秀でた演奏とマナーの良さで各種行事には必ず出演依頼があった。静商の花形クラブであった。（「静商90年の歩み」より）

二十七年の春、第五回選抜高校野球全国大会で硬式野球部の優勝時に、甲子園球場で本校ナインがピンチの時は「チャッキリ節」、チャンスの時は「天国と地獄」を演奏し選手達を勇気づけた。甲子園でのブラスバンド演奏は、本校としては、これまで例がなく、見守る数万の観客はもとより、全国に知れ渡った。秋の関東地区吹奏コンクールでは「美中の美」「セビリアの理髪師」を演奏し、二位となり静商ブラバンの名声を不動のものとした。

終戦、間もないこの時期に、静商音楽部で活躍し、音楽家としてのプロを目指し、東京の国立（くにたち）音楽大学に進学し、後に本校始め、他校にも足を運び、指導、普及に尽力した、大橋武由氏（第51回・昭25年卒）を始め、石上禮男氏（故人、第52回・昭26年卒）と疋野晴愛氏（故人、第53回・昭27年卒）らは、戦後復活した静商バンドの育成に後輩達へのパイプ役として、多大なる功績を残した。

二十九年に第一回東海吹奏楽コンクールが開催され、「美中の美」と「フィンランディア」を演奏し、見事本校は優勝する。

三十年代に入ると、景気の上昇に伴い、企業の設備投資も盛んになり、国民の生活水準も、徐々に向上し、高校進学率も五十％台に伸びていった。音楽部も、昨年に続き、第二回東海コンクールで連続優勝し、その後も、東海地区での上位校に名を連ねた三十年代だった。

四十年代には、高校進学率が七十％台に伸び学校数も増加し、他校においても、吹奏楽部の普及が盛んになり、私学校の台頭も著しく、三十五年より、県内を東、中、西の地区大会に分け、更に県大会、東海大会、そして全国大会へと、つながる現行の組織制度が確立し、本校は、四十四年の東海大会で六位、四十五年には金賞を受賞する。

五十年代に入ると第一次石油ショックの影響が大きく、今まで、四ヶ月で六千円だった授業料が、一万六千円となり家計を圧迫する。五十年、五十一年に東海大会で、銀賞を連続受賞するが、残念ながら、五十二年以降から平成期にかけては、県大会突破の壁が高く東海大会への出場が遠のいている。平成九年には、昭和二十六年より続く、静岡刑務所での、ブラスバンド慰問演奏会を通算三十年間続けた功績に、法務大臣より感謝状が授与された。現在でもこの活動は継続されている。

平成期での部活動も、四月の静岡祭りでの音楽パレードに始まり、静高との定期戦でのマーチング披露、吹奏楽コンクール、そして文化祭での演奏、刑務所慰問演奏、時には、同窓会や、小、中学校からの出演依頼があったり、年間スケジュールの最終仕上げで、今年節目の第六十五回定期演奏会に向け、男子部員八名を含め、総勢六十七名の部員達が、本校就任十年目の菊地博和教諭の指導とサポート役のOB、中村選氏（第78回・昭52年卒）も時間の許す限り応援し、連日、練習に、切磋琢磨している。

顧問の菊地博和先生（写真＝上段）のもと、定期演奏会に向けて熱心に練習に励む生徒諸君。音楽室には、今年8月にエアコンが設置された。

異なる楽器の奏でる音色の一譜一譜にも、特長や、変化が求められ、全ての音色が自分の役目を果たし、他の楽器の音色と調和する事で、人々に感動を与える。我々の日常での生活においても協調性が求められており、改めて、音楽の奥の深さに部員達の練習を通して共鳴した。

確かに、大会での上位入賞に高見を目指すことも、大なる目標ではあるが、音楽部に伝わる伝統の合言葉、

「音楽部五箇条」

一、思慮分別
一、忍耐努力
一、楽器愛護
一、一譜必修
一、清潔整頓

を、練習前に全員で唱える。この言葉の重みは、高校生活の三年間だけでなく、後輩諸君がこれから歩んでいく人生の中で、必ず大きな指針となるはずである。多くの先輩OB・OG達が、この言葉に込めた思いを忘れずに、日々の精進、努力に期待したい。

今年より練習場となっている音楽室に同窓会よりエアコンが設置され、「以前にもまして練習に集中出来るようになった。」と先生をはじめ関係者は大変感謝をしている。

なお、本年度の定期演奏会は、平成二十六年二月一日、静岡市民文化会館大ホールにおいて午後五時より開催される。今年も多くの聴取者に感動を与える演奏をしてくれることを期待したい。

末筆ながら今回の取材にあたりご協力頂いた、久保寅雄氏（五十四回・昭二十八年卒）、榛葉悦郎氏（五十六回・昭三十年卒）、稲森利明氏（六十四回・昭三十八年卒）の音楽部OBの皆様をはじめ、音楽部顧問の菊地先生、指導者の中村選氏、生徒諸君に厚くお礼申し上げます。

（文中一部、「静商90年の歩み」「静商百年史」、生徒会誌「白龍」参照／✎番記者 藤田）

第9回同窓会 ゴルフ大会

63回卒　山内一朗氏が優勝・

平成二十四年十月十七日、第九回静商同窓会ゴルフ大会が富士見ヶ丘カントリークラブにて開催。スタート時点では曇り、十二時前から雨という状況。

51回卒から90回卒までの二十九組、一〇四名が参加。優勝は、山内一郎氏（63回卒）グロス86ネット69.2、準優勝岡本政俊氏（62回卒）グロス91ネット69.4、第三位柴田馨氏（63回卒）グロス91ネット71.8、ベスグロは69回卒の古川衛氏の75で、一〇四位は136のスコアでした。

会費一、五〇〇円の内、五〇〇円は静岡新聞愛の都市訪問に寄付いたしました。多くの寄贈を頂いたお陰で、参加者全員にワンランク上の賞品をお渡しすることができました。

寄贈者名の紹介です。60回卒平野同窓会長、60回卒桑原副会長、61回卒河口総務委員長、63回卒大塩正一様、65回卒赤石副会長、69回卒伊藤幹事長、72回卒徳田クラブ奨励委員長、75回卒杉山副幹事長、86回卒佐藤副会長、富士見ヶ丘カントリークラブ。

以上の皆様有り難うございました。（✎宮）

平野同窓会長から優勝トロフィーが山内氏に贈られた。